**ヒヤミカチ節の表象の変遷**

2012/07/29

**■本レポートにおける表象の意味について**

　ある特定の楽曲が持つイメージはいかにしてかたどられ、いかにして受信されたか。ヒヤミカチ節が発する表象について、時代や出来事による変遷を考察する。

**■ヒヤミカチ節について**

　「ヒヤミカチ」とは、「ヒヤ」という気合を入れる声と、「ミカスン」の変化形で「～の音をさせる」程度の意味の語の合わさった、元気や気合を出すときの掛け声である。

　作詞平良新助、作曲山内盛彬となっているが、このことについても慎重に考察する必要のある曲である。

　歌詞は、以下1～5が記されている。(1)

◎歌詞

本歌　作詞・平良新助(ロスアンゼルス在)

1: 七転び転で　ひやみかち起きて　わした此の沖縄　世界に知らさ

替歌　以下　山内盛彬　作詞

2: 我や虎でもの　羽つけて給ぼれ　波路パシフィック　渡てみやびら

3: 花や咲き美らさ　楽や鳴ゐ美らさ　聴かさなや世界に　楽の手並み

※3の歌詞に著者上里平三氏より直筆の訂正を戴いているのでその通り記す。

4: 喜屋武と国頭の　岬取てあげて　沖縄あんてやり　世界に知らさ

5: 道や広々とぅ　島や細々とぅ　道ぬ真中に　かずら植えらな

◎替歌　詩　加藤省吾　(コロムビヤ　レコード発売)

1: 腕を組み歌おう　喜びの歌を　僕等皆明るい　日本の子　沖縄の子

2: 美しい海に　果てしない空に　七色の望みを　呼びましょよ　呼びましょよ

3: 野に山にデイゴ　紅く匂ってる　いつまでも変わらぬ　堅い誓い　堅い誓い

4: 変わるなよみんな　足並みそろえ　胸をはり進もう　日本の子　沖縄の子

注

(1)上里平三『琉球古典音楽　野村流稽古本(改訂版)下巻』上里平三,2009年,147頁.

ちなみに、現在上記以外の歌詞が一般的になっているが、それらは登川誠仁氏などによる演奏者の後付替え歌である。

**■ヒヤミカチ節創生に込められた表象**

　まず、『平良新助伝』に記された略歴を示す。沖縄自由民権運動の実践家であり、海外移民運動の先駆者である平良新助氏は、1942年、敵国民立退命令によって、ロサンゼルスの日本人街からアリゾナ州ヒラの砂漠地帯にある日本人収容所に入れられて抑留生活を送った。終戦までの間、筆舌に尽くしがたい辛苦を嘗めた。終戦によって解放されロサンゼルスにもどったが、琉球軍政府の軍籍に配属された息子の便りで、故郷沖縄の戦禍が想像以上なのに驚き1953年12月に急ぎ帰郷した。氏は荒廃した郷土に立って次の琉歌を詠んだ。

七くるびくるび　ひやみかち起きて　わしたこの沖縄　世界にしらさ

　以上が『平良新助伝』の内容を抜粋し短くまとめたものであるが、おそらく氏が琉球の地に立って詠んだというのは間違いである。その証拠を山内著作集第三巻から引用する。

　「ひやみかち節

七転び転で　ひやみかち起きて　わしたこの沖縄　世界に知らさ　ヒヤヒヤヒヤヒヤミカチウキリ

　私はこの曲を作ったのを忘れていたが、帰郷早々バスの中できかされ、この曲が私よりも先に来て、私を迎えてくれたのには恐縮した。

　この歌はアメリカから錦を飾って帰郷された今帰仁在の詩人平良新助さんの力作です。氏がロザンゼルス在中、ハワイの仏教会の恩人玉代勢法雲先生がこの歌を持って東京の私の家にみえ『大戦でうちひしがれた人心を復興するには、この歌を作曲して奮い立たしたらどうか』とすすめられた。

　その歌を一回見るや、その熱意に動かされ、ヨシー、ヒットして同胞の目をさまそうと決意した。作曲というものはその意欲のクライマックスの感じをとらえることだ。そして旋法も民族心理にぴったりする嬰陰旋法をとった。

　時に舞踊家の榊原氏が『沖縄の学校で舞踊講習をするが、何かよい曲はないか』ときかれたので、この曲をあげたら、コロンビア社に、オーケストラに私の三線を吹き込んで、そのレコードを使われた。詞は社の望みで邦語に直し『腕をくみうたおう……』にしたが、沖縄の社会では原歌を生かしたいものだ。

　このレコード歌は童謡式であるにもかかわらず、学校の門を越えて社会にもとびこみ、山奥の青年会や婦人会や子どもにまで、燃えひろがったのは、平良氏の情熱の結晶した結果で外人にも最も好かれた歌曲である。復興はなかったが、今は依存生活から独自生活に移る時、こういった曲が励ましになれば幸いである。」(2)

注

(２)『沖縄タイムス』1969年1月6日～2月8日.

さらに、追悼山内盛彬翁顕彰公演のパンフレットに書かれた氏の略歴には、

「1948年　(58才)　戦後初めて帰郷、荒廃した各地を劇団を組んで回っていた親泊興照氏に依頼を受けて……「ひやみかち節」等五～六曲を作曲」(３)

注

(３)佐藤善五郎『琉球王朝古謡の伝承と復元大成者追悼山内盛彬翁顕彰公演』沖縄タイムス社,1986年,38頁.

とある。

　新助氏は1953年からは逝去までずっと沖縄に住んでいた。盛彬氏は1948年までは東京、一時帰郷した後すぐ東京へ戻り海外へ。1960年に再度一時沖縄へ帰郷する。つまり、新助氏が沖縄に帰る前に既にヒヤミカチ節は完成していたのである。さて、この錯綜した情報を整理するにあたり、『平良新助伝』には誤謬、誤植、歴史的年号の間違い、写真とタイトルの不一致などが随所に見られる上、自身の書でないこと、『山内盛彬著作集』は自身の投稿であること、パンフレットの年譜は比嘉悦子氏が作成したことを踏まえると、おのずと事実が浮かび上がる。

　ヒヤミカチ節は、戦後沖縄の惨状を言伝で聞いた平良新助氏によってロサンゼルスで本歌が詠まれ、それをロス在中時に玉代勢法雲氏に伝え、さらにそれを当時既に琉球民族音楽の第一人者として認識されていた東京在住の山内盛彬氏に作曲依頼をして完成した曲であった。そして1948年、盛彬氏が沖縄島へ帰郷して親泊興照氏などに曲を授けたのである。1960年に盛彬氏が帰郷すると、氏はすでに作曲した事実を忘れるほど研究に没頭していたが、バス内ラジオで流れるほどにヒヤミカチ節は有名になっていた。

　以上がヒヤミカチ節誕生秘話である。大日本帝国編入後も自由民権化が他県に比べ著しく遅れ、奈良原知事から様々な弾圧を受け、海外移民という蜘蛛の糸にすがり、ようやくアメリカンドリームを掴んだ矢先に戦争がおこるという、1879年～1945年に見られる沖縄県史と平良氏の人生が混ぜ込まれた、七転び八起きの精神を戦後復興に活かし、またそれだけでなく沖縄が世界に誇るべき文化を有していることを強調して鼓舞するという詞に、さらに琉球民族音楽理論の研究の、民族旋法を重視した作曲が加わって、近代沖縄人の存在そのものを30字と数分に凝縮させたものがヒヤミカチ節の表象である。

　ここで山内盛彬氏による替え歌について説明する。2は、氏が寅年であり羽があれば太平洋を越えられるというスケールの大きい歌である。平良氏の活躍によって多くの沖縄県民がハワイ、アメリカ西海岸、南米などへ渡ったことを意識し、盛彬氏自身もその後1951年からアメリカ、南米、アフリカ、インドネシアを調査して回る旅を開始している。3は、沖縄の誇るべき文化は花(芸術や自然)と楽(音楽)であり、それを世界に示すべきだと言っている。4は、沖縄島南端喜屋武岬と、最北端の国頭辺戸岬を持ち上げれば、沖縄を世界に知らすことができるというまたしてもスケールの大きい歌である。5は、米政府下において道路事業が進み一号線(現国道58号線)が整備されたが、当時飢餓に苦しむ沖縄人が多い中軍事開発一辺倒であった政府を風刺した歌である。

　盛彬氏作詞の替え歌も含めて、戦争に打ちひしがれた沖縄人を鼓舞するにふさわしい曲であることがわかる。

　また、盛彬氏は童謡の作曲も枚挙に暇がなく、邦語版も童謡的ヒヤミカチ節として作られたものと推測できる。作詞は加藤省吾氏によるもので、日本政府の手を離れた今でも沖縄と日本は歩みを同じにし、沖縄がアメリカナイズされぬことを強調している。邦語版においては、ヒヤミカチ節は米政府下の沖縄が日本国のものであることを強調する表象であった。

　さらに、このヒヤミカチ節の特異なところは、三線のハイポジションを存分に使っていることである。三線の曲でこのハイポジションを使う曲は、筝曲瀧落菅攪など数少なく、ましてや民謡として使う曲はなかったのである。盛彬氏は、

「古(いにしえ)の先輩たちによって、三線は五オクターブも音が出るように造ってあるにもかかわらず、未だにその労に報いた者はいない。今、私はそのためにこの歌を作った。林助君、君が弾いてごらんなさい」(４)

注

(４)上里平三『琉球古典音楽の原点』湛水流伝統保存会,2004年.

といって照屋林助氏にヒヤミカチ節を伝授しているように、三線演奏者の技巧的な意味でも沖縄音楽の将来を憂い、その患を除くべくこのヒヤミカチ節を作った。この意味において、ヒヤミカチ節は、沖縄音楽の先駆的演奏方法の表象でもある。

**■沖縄民謡ブーム時のヒヤミカチ節の表象**

　1948年、親泊興照氏にヒヤミカチ節が伝わる。登川誠仁氏が最初に入った劇団が「松劇団」であり、団員に親泊興照氏が居た。これは私の推測だが、おそらくその時に登川誠仁氏はヒヤミカチ節を孫受けしたのではないか。その後誠仁氏が50年代半ばのＲＢＣの素人ノド自慢大会を皮切りに、カチャーシー名人の名を全沖に響かせるにつれて、登川誠仁氏の歌うヒヤミカチ節も有名になっていった。ここにおいてヒヤミカチ節の表象は、登川誠仁という早弾き名人の早弾き曲となった。

　盛彬氏の楽譜を見るとわかるが、元々のヒヤミカチ節は勇壮でゆったりとした曲であり、オーケストラや琉球楽器全般と合わせることのできる曲であった。しかしながら登川誠仁氏の手によって、ヒヤミカチ節＝元気で早い曲というイメージに変化したのである。

　米政府下になった沖縄人は、戦前の沖縄芝居、劇団による舞踊などに変わる新しい娯楽を発見した。それまでは三線演奏は舞踊や芝居と切り離すことのできない芸能であったが、ラジオやテープの普及、民謡ショーの開発によって、楽曲そのものを享楽できるようになった。

「照屋林助はいっている。『戦後、アメリカ軍が来てから三線を用いてやる音楽というものが非常に変わりました。戦前から戦後へと移り変わった十年間で急激な変化がありました。初め私たちは変わったのはテンポだと思っていたのですが、変わったのは音楽のリズムの方でした』」(５)

注

(５)平井玄『千のムジカ 音楽と資本主義の奴隷たちへ』青土社,2008年,265頁.

　沖縄娯楽の現代化の流れに合わせて、ヒヤミカチ節も表象が変わっていったのである。早く弾いてこそのヒヤミカチ節であり、技術的達成点と見なされるようになった。

**■ベトナム戦争とヒヤミカチ節**

　コザ市(現沖縄市)のゲート通りは、朝鮮戦争～ベトナム戦争のために集結した米軍たちによってにぎわい、音楽と暴力と性欲の街と化していた。そこには、原住民沖縄人対米国人というシンプルな対立項だけでなく、日本復帰問題、黒人問題、フィリピン・台湾・インド系の混住問題などが存在し、アジアで最も混迷を極める地域の一つとなっていた。この状況下で沖縄の音楽は自己主張を迫られた。1970年のコザ暴動に至るように、沖縄アイデンティティは一瞬でも気を抜けば消滅してしまうようなものであり、様々な方法で確立するに至った。

　当時幼少期を過ごした喜納昌吉氏は、この時「ハイサイおじさん」の原型になる歌を作っていた。この曲は沖縄言葉歌詞であり、異様なまでに熱狂できる曲である。その後昌吉氏は1976年に喜納昌吉＆チャンプルーズを結成し、ヒヤミカチ節も歌われたがそれはポップ風になり、三板の連打や太鼓の乱れ打ち、三線の異常な早弾きによってさらに疾走感を増している。沖縄音楽ポップ化の一軍としてのヒヤミカチ節が誕生した。

**■興南高校の甲子園優勝とヒヤミカチ節**

　本土復帰後は沖縄言葉による沖縄曲は受けが悪くなり、加速度的に日本人向けの沖縄音楽が大量生産されるようになっていく。そんな流れの中で、琉歌のヒヤミカチ節は特定の世代の中で固定化していた。

　久しぶりにヒヤミカチ節が脚光を浴びたのは、2010年春の選抜高校野球で優勝した興南高校応援歌としてだった。夏の甲子園での沖縄県高校としての初優勝、しかも春夏二連覇という偉業達成を前にして、新たにヒヤミカチ節が加わったのである。ハヤシを変更して、

ヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ　ヒヤミカチコウナン(興南）

として歌った。元々オーケストラアレンジが可能な曲として作られているのだから、当然ブラスバンドアレンジにしても良曲であった。また、波路パシフィックを渡って優勝を取りにいくという歌詞も見事にマッチしている。

　そしてついに興南高校はその偉業を達成してしまうのである。これは今年から導入したヒヤミカチ節のおかげだとして、各地の応援ソングとしてその偉業にあやかろうとヒヤミカチ節が熱心に歌われた。これは現在の日本の文化的風潮に地元中心主義的な傾向があり、その助力もあって沖縄言葉による応援歌というちょうどよい素材であったに違いない。現在において、ヒヤミカチ節は、沖縄という地元性を強調・鼓舞する応援歌としての表象を得た。

**■まとめ**

　このようにしてヒヤミカチ節は多くの地域の各世代に様々な印象を与えたことがわかる。しかしてそれは曲自身が持っていた魅力にあった。創生部分に多く文面を割いたのもそのためであろう。一時期は技巧的な面ばかり強調されていたが、現在本来の、沖縄アイデンティティを鼓舞するための曲としての再認識が進み、歴史の変遷の不思議を感じる。

**参考文献**

上里平三『琉球古典音楽の原点』湛水流伝統保存会,2004年.

上里平三『琉球古典音楽　野村流稽古本(改訂版)下巻』上里平三,2009年.

大里康永『平良新助伝』新興社,1969年.

佐藤善五郎『琉球王朝古謡の伝承と復元大成者追悼山内盛彬翁顕彰公演』沖縄タイムス社,1986年.

登川誠仁『登川誠仁自伝　オキナワをうたう』新潮社,2002年.

平井玄『千のムジカ 音楽と資本主義の奴隷たちへ』青土社,2008年.

藤木勇人『ハイサイ！沖縄言葉』双葉社,2004年.

山内盛彬『山内盛彬著作集　第三巻』沖縄タイムス社,1993年.